

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520518

研究課題名(和文) 英語談話標識の認知語用論的研究

研究課題名(英文) A cognitive pragmatic research to English discourse markers

研究代表者

西川 眞由美(nishikawa, mayumi)

摂南大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00411702

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語の会話や文章の中で情報や話題の展開を管理したり、話し手(書き手)の態度を表す談話標識という言葉項目に関し、先行研究を参照したり、映画や小説などからのデータを詳細に分析することにより、その意味的機能を考察したものである。たとえば、話題転換に使用される談話標識にはby the way, now, look, well, ohなどが用いられるが、それぞれの機能がどのように異なるのかを認知語用論の視点から考察し、既述した。

研究成果の概要(英文)：This research studies the functions of discourse markers. So-called discourse markers are linguistic items which are used to organize the information and topics in ongoing conversation or discourse and/or to express a variety of the speaker'(writers') attitudes toward what is said. They are very important when the hearers or the readers try to understand the speakers' or writers' real intentions. Several discourse markers, such as by the way, oh, now, look, and well, can be used when the speakers are trying to change ongoing topics. However, there are clear differences in function among these linguistic items. I closely examined the contexts where the specific discourse markers are frequently used and what roles these words play in discourse and what are differences in function among these discourse markers which are used in similar discourse slots.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：談話標識 関連性理論 認知語用論

1. 研究開始当初の背景

(1) 最近のコミュニケーション重視の英語教育の中で、いわゆる談話標識(discourse markers、以下DMと称す)の役割が重要になってきている。たとえば、リーディングにおいては、DMによって談話の構造をつかむことができる。リスニングについては、DMを聞き分けることによって談話の流れを理解できる。ライティングでは、DMを効果的に使うことによって論理的な文章を作ったり、内容の背後にある書き手の態度などを表すことができる。スピーキングでは、DMを入れることで命題内容に付随する話し手の態度を表したり、ネイティブのようなスムーズな会話ができる。このように、DMを通して談話の構造や展開をつかんだり、話し手の心的態度を理解することが可能になるため、英語教育におけるDM理解の必要性はどんどん増してきている。たとえば辞書や高等学校のテキストの教師用指導書でも取り上げられてきている現状がある。

(2) 言語学の分野でも、文を超えた談話文法の研究や談話分析、語用論、コーパス言語学の発展とともにDMは研究対象として最近どんどん注目されてきている。従来、基本的には他の品詞(接続詞、副詞、動詞、間投詞など)に属する言語項目の特殊用法と考えられていたDMが、談話の中でそれとは異なる独自の機能を確立し、さらにある項目は文法化が進み完全に独立した機能としてのDMの機能的意味を意味論的に記号化するに至っていることなどが明らかになってきている。

(3) 一方で、従来のDMに関する研究は、そのような(基本的に)他の品詞に属するDMや間投詞も含めたDMの真の意味や機能を正確かつ詳細に記述しているとは言い難い。たとえば、ある一つのDMだけに焦点を当てた研究や、特定の理論(一貫性理論や関連性理論など)に特化した分析方法や記述手法を取っているもの、またコーパスを使って様々なDMの事例をリストアップしているだけのものなど、どれをとっても包括的なDMの意味機能を考察した研究とは言えず、その全体像をとらえるには不十分と考えられる。

(4) 似たような談話の節目に生起するDMの違いについても、十分に研究されているとは言えない。たとえば、情報を追加する際に使用されるDM(and, moreover, also, furthermore, besidesなど)や、対比・対照を表すDM(but, however, neverthelessなど)、話題転換に用いられるDM(by the way, now, anyway, okay, look, wellなど)や聞き手の注意を喚起するDM(now, okay, well, lookなど)が、使用文脈や機能の上でどのよ

うに異なるのか、ネイティブスピーカーはこれらをどのように使い分けているのか、等に関して詳細に考察した研究は少ない。

2. 研究の目的

(1) oh, ah, uh等、従来意味を持たない声のジェスチャーと考えられていた間投詞に由来するDMの中核的意味を、元の間投詞の意味を基に分析し明らかにすること。

(2) look, now, y'know, you see, okay, I mean等動詞、副詞、句などに由来する談話標識の中核的意味を元の品詞の字義的意味と関連させて明らかにすること。

(3) それぞれのDMの中核的意味を元に、それが使用される文脈内での談話機能とそこから導出される話し手の心的態度や対人関係的機能などに関する多様な伝達効果を明らかにすること。

(4) 似たような談話文脈や談話の節目で使用されるいくつかのDMに関して、その機能における差異を映画のシナリオなどのデータの分析を行うことによって明らかにし、考察を行うこと。

3. 研究の方法

(1) James(1973)などの生成意味論の立場、Bolinger(1989)のジェスチャー的視点、Schiffrin(1987)等一貫性理論におけるDMの分析、さらに、Wharton(2003)やBlakemore(1987, 1988, 2004)等、関連性理論に基づいた認知語用論の立場からの分析、さらにAijmer(2002など)のコーパス言語学にも続く分析やSchourup(1999など)の先行研究等を主に参照した。

(2) 映画のシナリオや小説などの会話データを読み込み、その中で使用されるDMについて、COCAなどにおける会話のコーパスを利用し、その中で使用されるDMについて、質的・量的分析を行った。

(3) 集めたデータを詳細に分析し、まとめ、それらに関する先行研究を踏まえ、不十分と考えられる点、あるいは問題点を見つけ出し、それらについて考察し、新たに認知語用論の視点から分析を行い記述した。

(4) 歴史語用論(Historical Pragmatics)の知見を用い、BrintonやTraughottの考察を参照しつつDMの文法化についても検討した。DMとしての機能的意味を考える上で元の品詞に記号化されていた意味が希薄になっていったと考えられる言語項目を中心に文法化の進捗の程度などを分析し記述した。

(5) DMを分析するうえで最も大切と考えられるテキスト機能と対人関係調整機能について、それぞれのDMに関して詳細に考察した。前者は、前後の発話や内容、文脈をつなぐ機能で、先行内容と後続内容の論理的なつながりを主に検討した。後者は、話し手が伝えたい心的態度や、丁寧さ戦略という視点から検討を行い、ほとんどのDMはこれらと大きく関わっていることを確認した。また、このような機能のうち特にコミュニケーション上非常に必要とされる情報に関しては、高校のテキストや辞書(ジーニアス英和・和英辞典、大修館出版)を通じて広く公開する予定である。

4. 研究成果

(1) 一次的間投詞(oh, ah, huh, um など)に由来するDMは、それぞれが表す話し手の心的動作・心的状態に基づいたDMとしての機能を持っていること、また、それらが主たる文発話とともに使用することによって伝えられるさまざまな話し手の態度や丁寧さ(ポライトネス)に関して明らかにした。また、それらがどのように解釈されるのかも示した。

(2) 通常の語彙に由来するDM(now, look, okay, you see, you know, I mean, you know what など)に関しては、それぞれが持つ命題的意味を基にそのDMとしての機能的意味を明らかにし、それぞれのDMが主たる文発話とともに用いられるときに伝える様々な認知効果についても明らかにした。さらに、それぞれのDMがどのような文脈で使用されるのかについても詳細に考察した。たとえば、従来相手の注意を喚起する機能を持つとされてきた look は、相手の想定に無い情報を導入するにあたって一旦相手の視点を別の方向に向けることによってその機能を持つことなどを明らかにした。

また、いくつかの項目についてはその文法化の過程についても考察した。

(3) 代表的なDMの基本的な意味を明らかにし、それぞれがどのような談話の節目に現れ、どのような機能を有するのか、どのような言語使用域で使用されるのか、また似たような文脈に生起するDM同士の差異を明らかにした。たとえば、話題転換のときに話し手によって頻繁に使用されるDM(by the way, okay, now, anyway, look, well など)、また聞き手の注意を喚起する場合に頻繁に用いられるDM(well, oh, okay, you know など)が、実際にはどのように使い分けられているのかを明らかにし細に分析し記述した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 10 件)

西川 眞由美、感情表出にかかわる談話標識、映画英語教育学会西日本支部設立 10周年記念論文集、査読有り、一巻、2013、45-56

西川 眞由美、新旧の情報の授受を合図・管理する談話標識、摂南自分科学、査読有り、一巻、2013、51-66

Nishikawa Mayumi、Discourse Markers Indicating Topic Change in English-Japanese Dictionaries、Lexicography: Theoretical and Practical Perspectives、2011年、406-415

西川 眞由美、注意を喚起する談話標識、Setsunan Journal of English Education (SJEE)No. 6、2012年、109-124

西川 眞由美、DM look の手続きの意味、語用論研究 12号、査読有り、一巻、2011、1-20

〔学会発表〕(計 16 件)

西川 眞由美、談話標識 okay の機能的意味、日本語用論学会第 16 回年次大会、2013年 12月 7日、慶応大学

Nishikawa Mayumi、*English Discourse-Marker Dictionary*、X International School of Lexicography、2013年 9月 14日、Florence(Italy)

西川 眞由美、映画で学ぶ of course の語用論、映画英語教育学会第 18 回全国大会、2012年 8月 6日、京都女子大学

Nishikawa Mayumi、The Role of DM Okay in Discourse、Poetics and Linguistic Association 2013、2013年 8月 1日、Heidelberg (Germany)

Nishikawa Mayumi、Discourse Markers Indicating Topic Change in English-Japanese Dictionaries、アジア辞書学会 2011、2011年 8月 23日、京都テルサ

西川 眞由美、映画で学ぶ okay の語用論、第 3 回映画英語共育学会映画英語ワークショップ、シンポジウム「語用論で読みとく映画の英語」(招待講演)、2011年 5月 14日、京都外国語大学

Nishikawa Mayumi、Discourse markers of Topic Changes、International Pragmatics Association 12th、2011年 7月 4日、Manchester (UK)

〔図書〕(計 3 件)

Nishikawa Mayumi、*A Cognitive Approach to English Interjections*、東京：英宝社、2010年、総ページ 257 ページ。

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西川 真由美(NISHIKAWA Mayumi)
摂南大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00411702

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：